

い生活様式の今とこれか

~コロナ禍社会でわたしたちの生活はどう変わる~

現在、世界中で新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、人々の生活にも大きな変化をもたらしています。日本においても「マスクの着用」「3密の回避」など、新しい生活様式というスタイルが導入されましたが、というスタイルが導入されましたが、というスタイルが導入されましたが、というスタイルが導入されましたが、とで不安や戸惑いもあるようです。このような時代の変化のなかで、とで不安や戸惑いもあるようです。このような時代の変化のなかで、とで不安や戸惑いもあるようではるかで、障がいのある人もない人も誰もが暮らしやすい、新しい社会が確立されるようなヒントがあるのではないでしょうか。

や今後についてお話を伺いました。のある人にそれぞれの置かれた状況において、主に視覚や聴覚に障がい

「触る」ことに抵抗を感じる

下鉄に乗車中は空いている席が確認時間かけて通勤している。電車や地自宅から電車と地下鉄を利用し約1場までの移動は白杖を使い、一人で、全盲)。毎日、福岡市内にある職税覚障がいのある衛藤文江さん



染したり、 厚接触となってしまう。この「触る さんの腕を掴んで移動するため、濃 確認している。さらに、ガイドヘル 際には必ず机や椅子を触って位置を 接手で触れることになってしまう。 階段やエスカレーターの手すり、エ の役目となる白杖はもちろんだが とんど。移動には衛藤さんの「目」 手すりを掴んで立って乗ることがほ できないため、ドアの出入口付近の パーを利用するときには、ヘルパー また、職場や飲食店などで席に座る レベーターのボタン(ボタンを指で なぞって行き先階を押す際)には直 行為で、 自分自身がウイルスに感 他の人にうつしてしまう

> では、 は、 は、 は、 にとって「触る」ことは「見るい者にとって「触る」ことは「見るいがるため情報を知る重要な手もつながるため情報を知る重要な手ものながるため情報を知る重要な手ものながるため情報を知る重要な手が、緊急事態宣言以降があれるのですが、緊急事態宣言以降があた。 には、『視覚障がい者も多いようだ。このようにないま」を求められる今の生

マスク着用で生じた弊害

のを着用することであらためて実感力を着用することであらためて実感が悪いたのが頬の皮膚感覚だった。特にしたのが頬の皮膚感覚だった。特にを顔の皮膚感覚で感じることで、電車のホームの位置など周囲の情報を連のホームの位置など周囲の情報を連のホームの位置など周囲の情報をが感覚を鈍らせてしまうことになりが感覚を鈍らせてしまうことになっているようだ。

戸惑いながらの買い物ソーシャルディスタンスに

以前はデパートやスーパーで買い



困難な時もあったとのこと。 断られてしまう状況に。このような を避けるために買い物のお手伝いも も店員さんの数が削減され濃厚接触 業となる中、営業を再開したお店で 市内のデパートやスーパーなどが休 たそうだが、 どをしていただいたりと、快い対応 物の際は、 いマスクや消毒液も購入することが 社会情勢の中、 にいつも安心して買い物ができてい 緒に買い物に同行して商品の説明な んにお手伝いをお願いすることに躊 買い物もしづらくなってしま お店によっては店員さんが一 商品を手に取って確認し 緊急事態宣言が出され 以前のように店員さ

後の間隔を保つことを示すシールがルディスタンス"で床に貼られた前最近はレジに並ぶ際も"ソーシャ

実情のようです。っていいのか分からず、人にぶつかっていまうのではと不安もあるのがの案内がないと白杖ではどこで止ま

静寂した社会

落とした。 置や方向を判断するため、 者は たことで、 ようで戸惑いを感じた。 禍社会において外出が制限される 衛藤さんは、 が行き交う音などが消えた状況に ては在宅ワークの導入や臨時休業 となり不要不急の外出を控えてい 「空気」「匂い」などを頼りに位 緊急事態宣言中は、 「触る」ことのほか、 普段多くの人や車など 『私たち視覚障がい 』と声を 「音」 コロナ

経営危機に直面コロナの影響で鍼灸院が

福岡市内で鍼灸院を営む梅津茂とさん(全盲)は、3月頃から徐々にキャンセルの連絡が相次ぎ、4月になると感染を警戒し客足も減り収入にも大きく影響が出てしまい、「先の見通しが立たない状況で不安でした」と当時を振り返った。6月の緊急事態宣言解除後は、徐々に客足も戻りつつあり、は、徐々に客足も戻りつつあり、れているとのこと。

に取り組まれていました。 は常に消毒するなど感染防止対策 に触れるドアノブやスリッパなど シーツを使用する、院内で直接手 ッドにはその都度使い捨ての専用 っため事前予約制や、施術用のベ また、お客さん同士の密を避け

状態にマスク、消毒液が入手困難

手できなかったとのこと。 手できなかったとのこと。 手できなかったとのこと。 手できなかったとのこと。 手できなかったとのこと。 手できなかったとのこと。 手できなかったとのこと。

が印象内でした。

取材の最後には、「もし、1年、取材の最後には、「もし、1年、



大きな壁に 聴覚障がい者にとってマスクが

いのある篠塚毅さんにお話を伺いま 事務局に勤務し、 94名の会員が在籍しており、その 福岡市ろうあ協会には、ろうあ者2 ケーション手段はどうでしょうか。 聴覚障がい者の日常生活やコミュニ 新しい生活様式が導入される中、 自身が聴覚に障が

は会話をする時に、相手の「口の動 う声が多く聞かれた。聴覚障がい者 の話の内容が掴めずわからないとい のがマスクを着用することで、 き」や「表情」を読み取りながら、 コロナ禍において、 多く聞かれる 相手



すると… ニケーションがとりづらくなってし それらがわかりにくくなり、 とるため、マスクを着用することで 話の内容や相手の気持ちなどを感じ まうそうです。いくつか事例を紹介 コミュ

を遠慮されるケースがある。 ②筆談をお願いしても、感染リスク などの行政職員が説明してもらって ①マスクを着用しているデパートや を懸念し筆記用具の受け渡しや筆談 も何を言っているかが伝わらない。 スーパー、コンビニの店員、区役所

て戸惑ってしまった。 ていただけたら安心できたが、マス 用するように」と一言筆談で対応し 外されると入館できない」と筆談も ④病院を利用した際に、「マスクを シには電話番号のみで、FAXやメ ③コロナに関する情報提供等のチラ クを着用したまま一方的に説明され なく入館を拒否された。「マスク着 い合わせができないことがあった。 ルアドレスの記載がなく予約や問

できなかった。 の会見では手話通訳がついておら のみ手話通訳がついたが、それ以降 ⑤市長による記者会見時には、 タイムリーに情報を得ることが 1

態がわかりました。 スクの着用が「壁」になっている実 で、聴覚障がい者にとって、 マ



会長の山本秀樹氏(左)と篠塚毅氏

これからの情報保障の あり 方

訴えた。 理的配慮の観点から特別な会見だけ きることを知ってほしい」と切実に あると安心して情報を得ることがで 訳者が当たり前に情報を伝える姿が ではく通常の会見においても手話通 ガードやパーテーションで間仕切 手話通訳者がおり、透明のフェイス になったが、一方で篠塚さんは において、首相や知事の横や後ろに テレビではコロナ関連の記者会見 情報を伝える姿を目にするよう 合

[信手段も柔軟な対応が必要

進歩し、 を使ってZOOMやテレビ電話のよ コロナ禍社会となる中通信手段も パソコンやスマートフォン

> ず、お互いにパソコンやスマートフ するうえでも-Tサポート支援な をとることができない人たちも多く オンを活用してコミュニケーション を持っていても操作方法がわから 障がい者のなかにはスマートフォン いるとのこと。今後、コロナと共生 信手段が増えている。 ターを通して、 情報環境の整 直接会わなくてもお互いモニ 手話で話し合える通 しかし、

備の必要性も切実 な課題だ。

との共生 Withコロナ時代×障が 61 者

が求められるのではないでしょうか。 様々な政策に反映することが必要 紹介した障がい者の声を、 らコロナと共存していくうえで、 きるのは何年後でしょうか。これか 私たちが安心してワクチンが使用で 開発が進められていますが、実際に しやすい「新たな共生社会」の構築 ロナウイルス。様々な国でワクチンの まだ終息の目途が見えない新型コ 障がいのある人もない人も暮ら 今後の 今回